

ノグラフ「慢性胃炎, 1970」には, “慢性胃炎を病理学総論で定義される慢性炎の桎梏から解き放って, 胃粘膜のびまん性変化を表す術語とする”という見解が述べられている。木村健は内視鏡下の系統的生検で, 胃底腺領域の萎縮が加齢とともに進むことを証明した (Gastroent 63, 1972)。Woodらが好中球の浸潤は急性増悪の所見としたのは慧眼であった。

Kochに始まる microbe hunters の時代から胃内細菌の報告はあったが, アメリカの消化器病医 ED Palmer は “1,180 個の胃吸引生検で細菌を認めなかった。剖検胃の細菌は死戦期のもので, 胃酸が在る胃では細菌感染は起こり得ない。この種の研究は以後無用である”とした (Gastroent 27, 1954)。データが不備な短報であるが, 大家のこの発言はその後の研究を妨げた。同じ頃に “胃粘膜にはウレアーゼ活性が在り, 抗菌薬投与で活性が低下するから感染している細菌による”ことが報告されていたのだが, 生理学・薬理学分野の出来事で

あったので (Physiol Rev, 1955), 注目されなかった。

演者自身の場合を反省である。1962年頃から数年間胃洗浄液の細胞診に従事したが, ゴミと思った夾雑物中に HP が存在したはずである。1967年頃に胃粘膜のウレアーゼ活性によりアンモニアが生じて胃酸を中和する, 尿素を主成分とした米国発の潰瘍治療薬カルミントの治験を命じられて奇妙な細菌の存在を知ったが, そのままにしまった。1985年頃から胃カメラ検査後の急性胃粘膜病変が問題になった。すでに HP が発見されていたのであるが, その激しい病変が内視鏡を介した HP の感染とすぐには思いつかなかった。

演者は細菌感染が慢性胃炎の原因であると, なかなか納得できなかった。しかし Koch の条件に関する川喜多愛郎の行き届いた考察を繰り返し読んで (日新医学 33, 1994), HP がその条件を満たしていると分かった。昔からある HE 染色標本でも, 鏡検で HP の感染を診断できる。

(平成 21 年 3 月例会)

書籍紹介

『杏雨書屋所蔵 医家肖像集』通覧抄

肖像という媒体を経て歴史を探ろうとする, 又は留めようとする試みは, 絵画を始めとして塑像, 彫像, 銅板画そして近代における写真といった形での表現が, 特にヨーロッパにおいて盛んであります。

ウィーン大学の医学部講内に一歩足を踏み入ると, 幅広い並木道のはるか彼方に巨大な近代外科の祖ビルロートのブロンズ像が屹立睥睨しております。愈々校内に歩を進めると外壁の側面に等身大の上半身レリーフがあり, 更に病院や学舎の数々の空間に, これでもかとばかりに彼の大きな肖像画が世紀を跨いで掲げられています。外科学教室にはビルロート II 法による胃・空腸吻合の世

界で初の標本が見られるといった具合です。これらの肖像が持つ表情は, どちらかというともれも無機的画一的で, 歴史を探ろうという意図よりも, ひたすら伝統的ハプスブルグ王朝流の絢爛さと権威を誇示しようとする意図が強いようです。

我々と縁の深い新興勢力のオランダでも, 減多やたらと油絵肖像画, そして出版物における銅版画肖像が溢れ, 予めよほど調べなければ一体誰の肖像画か量が多すぎて良くわかりません。文章をよく読めない外国人にとっては, ただの偉人としての印象から飛躍がないのです。英, 仏, スペインといった文明先進国においても, 概ね同じような肖像の物量と表現パターンを持っていることに

変わりなく、彼らの文明の淵源がギリシャそしてローマのそれであることに思いを馳せればその表現ぶりも理解のうちといえましょう。

翻って我が国における肖像というメディアの存在は如何かといえば、仏像仏画やそれに纏わる聖人の画を除いては極めて量的に少なく内容も頼りない。ましてや医学に関する、それも系統的オブジェクトとなれば近代に至るも極めて断片的、個人的な存在であるとしか言いようがありません。

此のたび武田科学振興財団図書資料館『杏雨書屋』による開館三十周年を期して企画された『杏雨書屋所蔵 医家肖像集』を拝見する機会を得まして、まこと興奮を覚えた次第です。故藤波剛一氏蒐集の177点の掛け軸に関してはきっかけが昭和11年に遡り、これに杏雨書屋独自収蔵の肖像34点加わったとのこと。時代は平安から明治までと、ここでは量的な多さよりも代表的医人を殆ど網羅した内容の厚みに驚嘆します。通覧した私見を少しく述べさせていただきます。

先ずは肖像の日本画としての繊細さと表情の持つ独特のニュアンスの再現性であります。ヨーロッパの油絵媒体にはこのような感性はなく、勿論彼の地の油絵にも繊細な表現がありますが、恐らくこれとは異次元の世界でしょう。殆ど全ての表情が夫々の微妙な個性を表していて、その人がどのような性格の先哲であったのかまでが推察できうるような見事さであります。おそらく色褪せた下地を含めて、IT技術による修正や部分的な色彩強調などもあったかと推測しますが、画家が違うのにまるで被写体が一堂に会したごとき整合性さえ感じられるのは筆者だけの感慨でありましょうか。

次に編集者の緻密な同定記事の秀逸さであります。同定作業中に実は別人の肖像と判明したという一例が示すように、徹底した史実の追及態度は代表編者小曾戸洋氏特有の学問的習性であって、長年の経験と知識量の豊富さを物語っています。古文書の読解力と鑑識眼に長けた二人の気鋭執筆

者天野陽介氏、町泉寿郎氏の傾倒ぶりも見過ごすことはできません。まるで知らなかった医学的史実を読み、そして肖像をもう一度見直すことにより、鮮烈な印象を今頃になって得られるという喜びは、本書が世に問われた目的のまさに真骨頂でありましょう。

肖像一人ひとりの感想を記したいが紙面が足りないで、最後に或る一人の描写について述べます。第六十 小島宝素の裸身の影絵であります。どのような経緯で障子に映る裸身をなぞったかは知る由もないが、遊び心であろうことは想像に難くありません。奥医師法眼にまで登り詰めた醫籍の蒐集鑑識家であったというこの人物の影絵について、謹厳実直なこの人物はスキンヘッドで後頭部の皮膚が弛緩してうねっています。肥満体の上半身裸体には乳頭が小さく浮き出て今にも息吹きにより動きそうな風情です。墨絵の輪郭のみの肖像がそれも敢えて側面を捉えたことが却ってリアリティ溢れる映像にしています。

反面このような構図は当時下世話な町人たちの遊興の場で試みられた痴技に近い作図に前例があると考えますが、不思議とここでは下品な雰囲気は感じません。ノーブルな遊び心とでも評すべき作品で、全般的に生真面目で美しすぎるこの大冊における唯一のアクセントであり、例えればエリザベス・テイラーの顔のホクロにも似たページであります。彼女の顔立ちは余りにも整いすぎて、まるで彫刻のようで親近感に薄れるため、口元にホクロをつけたという伝説があるのです。

何れにもせよ、痛快なほどに見事な医家たちの肖像画集の完成であり、尚且つ今後の増幅や補充といった、絶ゆまぬご精進（重版）を念じて止みません。

（田中 祐尾）

[武田科学振興財団杏雨書屋，〒532-8686 大阪市淀川区十三本町二丁目17番85号，TEL.06(6300)6815，2008年6月，31cm，436頁，非売品]